わたくしを穢しなさいっ！
けが
お嬢様の婚約
こわしちゃうわよケイカク
小説 天戸祐輝
挿絵 SHUKO
立ち読み版

一章　わたくしを穢しなさいっ！　006
二章　結婚なんかしない作戦よっ！　031
三章　恋人の振り作戦、ただいま実行中っ！　073
四章　暴走メイドっ!?　120
五章　初めて……は、記念な場所でっ!?　166
六章　わたくしを孕ませなさいっ！　208

登場人物紹介

Characters

沢渡綾華（さわわたりあやか）

わがままな箱入りのお嬢様。祖父が決めた婚約話を壊そうとしていたところ、偶然出会った潤也を利用する。

灯倉麻衣（ともくらまい）

幼い頃から綾華と育った専属メイド。普段は大人しいが性に奔放な一面もあり、時に暴走する。

兼光潤也（かねみつじゅんや）

ごく普通の学生。なのだが、街で綾華に会ってしまった事から無理矢理彼女に協力させられることに。

どうしてこんなに柔らかいものが形も崩さず、胸について揺れているのだろうか。などと、感動を覚えていたら。

「ひゃあぁあぁあっ!!　な、なにをするのよっ。この変態バカっ！」

彼女が可愛らしい悲鳴をあげながらソファーの端まで飛び退き、怒りながら両腕で胸を庇い隠した。

「へ、変態バカって、自分から穢してくれって言ったんじゃないかっ」

「そ、それはそうなんだけど、まだ心の準備ができてないんだもの……」

（今さら準備って……）

今さら心の準備が。とか説明されても、数日前に自分から不良に犯されようとしていた彼女に言われても、まるで説得力がない。

「きょ、今日はあなたがわたくしになにかをするんじゃなくて……。えっと、わたくしがふしだらな女だと思わせて、相手を幻滅させればいいだけなんだから……」

恥ずかしがりながらも、そう口にした彼女が突然ソファーから立ち上がり、トコトコと廊下を歩いて一つの部屋に入っていく。

「？　どこ行ったんだ、あいつ」

「さあ、なんでしょう？」

残ったメイドと顔を見合わせながら首を捻る。

しかし、一分もかからない内にお嬢さまはリビングに戻り、手に持っていた物体を渡してきた。
「なんだこれ、カメラ？」
「そうよ、使い方くらい分かるでしょ」
押し付けられたムービーカメラを見ながら、これを渡された意味を考える。が、これをなにに使わせようとしているのか分からない。
「相手を幻滅させる。って、言ったばかりでしょう。だから、わ、わたくしがレズだと思わせるために、麻衣といやらしいことをしている姿をそれで撮ってっ！」
「わ、わたしも参加するんですか?!」
もう驚く気さえなくした潤也のそばで、メイドが驚いている。
しかし、レズだと思わせる。という発想がよく分からない。
「レズですか？　確かに、前にわたしがそういうことを言いましたし。……面白そうですね。それに、結婚を壊すためなら喜んで協力しちゃいます、お嬢さま」
（麻衣さんの入れ知恵か……）
レズの発想がよく分からなかったが、これで納得だ。
メイドも綾華の提案をあっさりと受けて、楽しそうに近づいていく。
「では、どうしましょうか？」

「し、知らないわよそんなの、経験がないんだもの……。だ、だから、麻衣がわたくしにエッチなことをしてっ」
「してっ、て言われましても、わたしだって同性との経験が多いわけではないですから……。でも、まずは服なんて邪魔ですよね。脱いじゃいましょう」
「え、ええ……」
（経験あるのかよ……）
呆れる潤也のそばでメイドの提案に頷いたお嬢さまが、赤いネクタイを解いて床に落とし、制服ブラウスのボタンに指をかけていく。
「お、おい、ちょっと待ってっ!? 俺がここにいるんだぞ」
「わ、分かっているわよ、そんなこと。ちゃんと撮ってよねっ」
「ええ、ちゃんと撮ってください。見られるのも興奮しますから」
（興奮って……）
レズ行為。という提案は聞いていたものの、女性経験のない自分がその行為を撮るとなると緊張する。まだ二人とも制服とメイド服を着たままだというのに、心臓はドクンッドクンッと高鳴り、掌に汗が滲む。
「楽しみましょうね、お嬢さま。潤也さんにおっぱいとア・ソ・コをいっぱい見せて、興奮させてあげましょう」

「見られるなんて……恥ずかしい……」
「ん？」
楽しそうにしゃべる麻衣と違い、囁くほど小さな声で呟いた綾華が、ブラウスのボタンを外し始めた。
ゴクッ……。
思わず喉が鳴る。
わがままで自己中心的な美少女が、自分からその肢体を見せようとしているのだ。
ブラウスのボタンが一つ外れる度に、潤也の心臓の音は大きくなり。大きな肉果実を包むピンクのブラジャーが見えるだけで、ズボンの中の股間がムズムズし始めてしまう。
「ちゃんと、撮ってるの……？」
「あ、ああ、ごめんっ」
ブラを見せた彼女に青い瞳で見つめられ、慌ててムービーの録画スイッチを押してレンズを向ける。
「おおっ⁉」
ムービーの小型画面を見た途端、思わず声を出してしまった。
小さな画面には、金髪美少女の大きな肉果実がドアップで映り、白い肌やブラカップに浮き出した頂の位置までがはっきりと分かる。

「声なんか出しちゃって……」
と言いながらも、綾華はパサッとブラウスを床に落とし、そのままスカートのホックまで外して脱ぎ、輪にして足元へと落とす。
カメラのレンズは大きな胸から細い腰へと移動し、ピンク色のハイレグショーツまで映して、お嬢さまの綺麗な肢体を記録していく。
（すごっ！）
ゴクッ。と喉を鳴らしながら撮影に集中し、ハイレグショーツをアップにした途端。そこから他の場所へレンズを向けられなくなってしまった。
ただでさえハイレグでセクシーなショーツなのに、女の子の大事な部分を包む布が女肉の柔らかさで膨らみ、シルクの布に縦長の淫裂まで浮き出している。
太腿はムチムチとしていて甘酸っぱくも淡い色気を振り撒き、思わず手が伸びてしまいそうだ。
「ど、どこ撮ってるのよエッチ。もう見ないでよねっ！」
「見ないでよねって、どうやって撮ればいいんだよ」
「か、カメラだけ向ければいいでしょ」
映していたショーツを両手で隠しながら言われると、なんとなく罪悪感を覚えてしまう。
しかし、見るなと言われても、カメラで撮っている以上、見ずにいるのは不可能だ。

「わたしも撮っていいんですよ。潤也さん」
綾華の言葉に困っている中。突然メイドに話しかけられ、綾華の淫部を撮影していた恥ずかしさを感じながら振り向いた途端。そのままムービーのレンズを動かせなくなった。
お嬢さまが制服を脱いでいる最中にメイド服を脱いだ麻衣が、惜しげもなく白い下着姿を晒していたのだ。
胸は綾華よりも小さいが、それでもグラビア雑誌のモデルよりも膨らんでいて腰も細い。ショーツに包まれた淫部もふっくらとした女肉で膨らみ、淫裂の縦皺まで浮き出ていた。
「どうですか？　お嬢さまとわたしの身体は？」
「う、うん。すごい……」
としか言葉が見つからない。なにせ、下着姿の女の子を生で見たのは初めてだ。緊張と興奮で、喉がカラカラになっていく。
「クス、嬉しいです。興奮してくれるのなら、もっと近くで撮ってくれてもいいんですよ」
本気だか冗談だか分からない口調で、メイドがブラカップをすこし浮かせて乳肌を見せてくる。
なんとなくだが、このメイドの性格が分かってきた。
普通ならとめるであろう『不良たちに犯される』という作戦を陰からムービーで撮ろうとし、今もレズ行為を楽しもうとしている。

つまり、エッチなことに関しては興味が強く、自分の欲望には素直な性格。でなければ、レズなんて提案はしないはず。

大人しそうな顔からは、まったく想像のできない性癖の持ち主だ。

「わ、わたくしたちの身体のか、感想なんていいわ。そこで、その……するんだから、早く退いてっ」

今にも見えそうなメイドの肉果実をレンズに映していたら、顔を真っ赤にさせた綾華が潤也をソファーから退かし、麻衣とともに腰をかけた。

半ば強引に撮影させられているが、モニターに映るのはすごい光景だ。

ピンクのセクシー下着と白い下着姿の美少女二人が、目の前でソファーに並んで座っている。思わず、緊張で彼女たちを撮るカメラが震えてしまった。

「それじゃあ、お願い」

「はい、お嬢さま」

「んぁっ」

綾華がメイドに頼んだ途端。麻衣はそっとお嬢さまのメロンのような美峰乳を下から持ち上げ、ピンクの下着越しに柔房を揉み始めた。

小さな手が動く度に、下着に包まれた肉果実が柔らかく揺れながら形を変え、お嬢さまの桜色の唇から吐息が洩れる。

「すごく柔らかいですよ、お嬢さま。しかもこんなに大きいのに張りまであって、すこし悔しいです」

「そ、そんなこと言っても……んっ、好きでこんなに大きくな……ひゃんんっ⁉」

ブラ越しに大きな胸を揉んでいたメイドの手が、カップに浮き上がっていた乳芽を摘まんだ途端。お嬢さまが可愛い声をあげながら肢体を強張らせた。

二人の呼吸はドンドン荒くなり、自然と白く長い美脚が開いて、布に包まれた大事な部分を披露してくる。

（こ、こんなすごいのを見るなんて……）

昨日までの自分から考えると、夢のような光景だ。

手に持ったカメラは、緊張で震えながらも彼女たちの胸や淫部を映し、もっとすごい部分まで撮ろうとアップにしてしまう。

「わたしの胸も、揉んでください」

メイドがそう言いながら美峰乳から両手を離し、自分のブラをずらしてお椀形の胸を晒す。

「うおおおっ！」

初めて見た女の子の胸に、思わず声が出てしまった。

おそらくはDカップはある肉果実。それが惜しげもなく晒されたのだ。しかも、濃いピ

ンク色の乳芽が膨らんで尖り、誘うように小刻みに震えている。
レズ行為をする恥ずかしさに、美貌を赤く染めたまま戸惑っているお嬢さま。そして、綾華とエッチをする興奮に、楽しそうな笑みを浮べているメイド。あまりにも対照的すぎて、淫らな雰囲気だ。
（さわりたい、俺もさわりたいっ）
と思っていても、手を出すことなんてできない。
潤也は自分の股間がムズムズしていることに気づきながらも、お嬢さまが両手で触れ始めた肉果実にレンズを向けた。
「ま、麻衣だって、こんなに柔らかいじゃない」
「きゃふっ、くすぐったいですお嬢さま」
胸を揉まれたメイドが、肢体をよじりながら声を洩らす。
「それじゃあ、わたしもおっぱい揉んじゃいますね」
「きゃあっ!!」
再び綾華の胸に手を伸ばしたメイドが、素早くシルクのピンクブラをずらして大きな肉果実を晒した。
さすがに胸を見られたのは恥ずかしいらしく、お嬢さまは小さな声で悲鳴しながら、潤也から隠すように胸を庇(かば)う。

（見えちゃった、あの大きなおっぱい全部っ!?）
見えるだろうと思っていたが、実際に見るとすごい迫力だ。
大きいのは分かっていたが、形まで見事に美しいお椀形。しかも、乳輪も小さくて、乳首の色も可憐な薄ピンク色。
性格はともかく、見た目だけなら本当に最高の美少女だと感心する。
「隠してどうするんですか、お嬢さま」
「で、でも……」
麻衣の言葉に、チラチラと潤也を見ながら綾華が答え返す。
「また大きくなったみたいですね……。もうEカップではきついのではないんですか？」
「ちょっ、サイズまで言わない……あふぁっ」
とてもEカップには見えない肉果実を隠していた手を払ったメイドが、薄ピンク色の乳芽に吸い付いた。
下着越しの愛撫で十分尖っていた綾華の乳芽は、メイドの口でチュパチュパと音を鳴らされ、大きなリビングに鳴り響く。
「んあっ、んっ……や、胸がくすぐったい……んふぁ……」
金色の長髪を揺らしながら濡れた声を洩らす彼女が、肢体をくねらせながら大きな胸を上下に揺らす。

自然と開いた細い美脚は、しっとりと汗にまみれて艶めかしい色気を振り撒き、ピンクのハイレグショーツの股布がすこしずつ色を変え始めた。
「こんなに大きいくせに敏感だなんて、反則すぎです。だから、このエッチなおっぱい、もっとイジメちゃいますから。はむっ、んちゅるるるっ」
「ひゃうあっ！　あふっ……そんなことされたら……んぁああっ！」
メイドが二つの美峰乳を揉みしだきながら、交互に頂に吸い付いた。
麻衣が同性ならではの優しく撫でるような愛撫で肉果実の形を歪め、尖った薄ピンクの頂に軽く吸い付く度に綾華の肢体が小刻みに震え、ショーツの染みが広がり透けていく。
「そ、そんなに胸ばかりイジメるなんて。わ、わたくしももっと麻衣のを……」
「やんっ⁉　それは、それは強すぎますぅううっ！」
大きな肉果実を責められているお嬢さまが、お返しをするようにメイドの胸に両手を伸ばし、柔房に優しく触れながら乳首だけを強く摘まむ。
互いの胸を愛撫する金髪と黒髪の美少女は、赤く染まった肌を震わせて発情の汗を吹き出し、ハミングするように濡れた吐息を部屋に響かせていく。
濃いピンク色の乳芽だけを集中的に責められるメイドも、興奮と胸の刺激に我慢できなくなったらしく、肢体をピクピクとさせながら白いショーツを透けさせた。
（二人とも、おっぱいだけじゃなくて、アソコまでっ）

カラカラになった喉を鳴らしながらレンズをショーツに向け、透けたピンクと白の布越しに、ヒクヒクさせている淫唇をアップで撮る。

愛撫しあう美少女の姿に、潤也の興奮は高まってしまい、冷房がかかっているにもかかわらず全身が汗ばんでしまう。

ジンジンとする股間は痛みさえ感じ、確かめなくても元気になっているのが分かる。

「んっ、じょ、上手になって……はぁはぁ、お嬢さまったら、エッチすぎます」

「だって、麻衣がこんなに胸を……んんっ」

胸を吸っていたメイドが唇を離し、お嬢さまと同じように美峰乳の頂を摘まんで転がした途端。綾華がピクンと肢体を跳ねさせて喘ぎ、黒髪美少女の胸から手を離した。

完全に濡れ透けてしまったハイレグショーツからは愛液が染み出し、瑞々しい太腿を淫らに彩っていく。

「もう我慢できないですか？　お嬢さま」

「んっ、ふぁ……はぁはぁ……」

ソファーの背もたれに体重を預け、完全にメイドに身を任せた金髪美少女が、青い瞳を潤ませながらコクンと頷く。

「では、今度はこっちですね」

麻衣の手が胸から離れ、白い肌を撫でながら、色を濃くしたピンクショーツの中に忍び

込む。
「ふぁああっ！　そこ、そこダメ……そこは……っ⁉」
「大丈夫ですよお嬢さま。気持ちよくさせてあげますから」
チュプッ、チュプチュプ……。
「んあっ、あっ、くぅんんんんっ！」
綾華が金色の長髪を振り乱しながら大きな胸を揺らし、両脚を左右に広げて淫部を上下に動かし始めた。
彼女の穿いているピンクショーツはメイドの指でモコモコと膨らみ、濡れた淫音が奏でられる度に、透けた布越しに細指で擦られている淫唇と秘孔が覗ける。
「まだ処女なのに、このエッチな孔がわたしの指に吸い付いてきます。わたしも、わたしも我慢できません……お嬢さま、わたしのも……わたしのもぉ……」
麻衣にせがまれたお嬢さまが、彼女と同じように片手を白いショーツの中に差し込み、淫唇に指を這わせた。
「あふぅ。あっ、すごいこれ……アソコ……アソコおかしくなっちゃうっ！」
「指、指すごいですっ！　お嬢さまの指なのに、男の人のペニスよりもいいなんて……」
二人の淫部から濡れた音が鳴る度に唇から嬌声が洩れ、ショーツから染み出した愛液が太腿を艶めかしく光らせてソファーを汚していく。

●REC

しかも、両手で揉んでいる美峰乳は、子宮口を突き上げる度に大きく揺れ、視覚的にも潤也を射精へと導こうとしている。

ペニスはもうビクビクと脈打って肉幹が震え、根元に精液が溜まり始めた。

「んうッ、あッあッあッ、ふぅああッ！　お腹の中で潤也のが太く……ひふッ、はぁはぁ……好き……好きなの……だから早く出してッ、大好きな潤也の熱いのわたくしに出してぇぇぇぇッ！」

「あ、綾華……お、俺も綾華のことっ！」

ジュプッ、ジュプジュプッ、ジュプジュプジュプッ！

潤んだ青い瞳に見つめられながら、濡れた声で言われた告白に、自分の気持ちが確かなものになっていく。

出会いこそ最悪。性格だってわがままで自分勝手な彼女を、今は誰にも渡したくないと心の底から思う。

結婚相手の決められた綾華を、どんなことをしてでも自分のものにしたくなった潤也は腰を激しく動かし、スイートルームにお腹と淫部がぶつかりあう音をパシッパシッと鳴り響かせた。

「くぅあンッ！　はげ……激しいッ！　んはッ……お腹の中が潤也のでいっぱいにされて……わたくし初めてなのに……初めてなのに……」

完全に痛みを消した彼女の膣内が大きく蠕動し、無数の膣襞が肉幹に巻きついて亀頭のエラ裏まで刺激してきた。

精液を求め始めた膣内は、麻衣のとは比べられないほどの襞のうねりで肉幹を刺激し、尿道の中までくすぐられたような悦痒さで射精させようとしてくる。

「全部……全部俺のもんだっ！　綾華の全部俺だけの……」

「う、うん……全部潤也の……わたくしの全部潤也のだからッ！　早く……早く来て……わたくしももうッ……もうイッ……ンふぅううッ！」

快楽と幸せの入り混じった笑みを見せた彼女が、真っ直ぐな瞳で今の気持ちを伝え、自分の肢体はもう潤也のものだとばかりに桃尻をくねらせてくる。

お嬢さまのなめらかな腹部は下から上へと向かって波打ち、秘孔は喰い千切るような力で肉幹の根元を締め付けてきた。

うねる膣壁はさらに締め付けを強くしてペニス全体を包み、尿意にも似た射精直前の痛痒れが肉幹全体に走り、股間に溜まった濁液を駆け登らせていく。

「くぁッ、出る……出るっ！」

「あふッ、あッあッ、あふんんンッ！　出して……潤也の好きなところに……はふッ！　わたくしも……わたくしもイク……もう限界なのぉおおおッ！」

自分と同じように絶頂が近づいた綾華が、涙混じりの声で叫びながら、桃尻を何度も跳

ねさせて精液を求めてくる。
射精の欲求に駆られた潤也は、もうすべてのことを忘れたようにお嬢さまの肢体を突き上げ、大きな胸を揉んでいた手で細腰を掴んで激しく腰を叩きつけた。
「あひッ、はふッ、ンぁああッ！」
もう彼女の唇から喘ぎ声しか聞こえない。
激しい腰つきに切っ先は何度も子宮口を叩き、射精を告げるように一回り太くなった亀頭が、聖なる入り口に先液を撒き散らす。
「もう、もう限界だっ！　いくよ綾華……出すからなっ」
「あふッ！　はひッ、だ、出して……見えるように……わたくしに潤也の……あッ、あッあッあッ、あはぁああッ！」
肉幹を登ってきた精液が亀頭を限界まで膨らませ、今にも弾けようとした瞬間。同じように膣内を痙攣させ始めた綾華が、大きく揺れていた美峰乳を自ら揉みあげ、尖った乳芽を擦り合わせるように中央に寄せてきた。
「出る……。出る……くぁああっ！」
「あふッ、あッ……えッ⁉　な、中に出すつも……きゃうんッ！　はふッ、ひゃッ、あッあッあッ……ひゃぅうぅッ⁉」
びゅるるッ！　びゅぷッ……びゅるびゅるびゅるびゅるるるるるるるるるッ！

「ひゃふぅううううッ！　な、中にッ……わたくしの中に潤也が……あふッ、くぅんんンンンんんンんンン――――――――――――ッッッ！」
プシュッ！　プシュウウウウウウウゥゥゥゥゥ……ッ！
激しく肢体を揺さぶりながら、自ら胸を揉んで寄せ上げたお嬢さまの姿に、子宮口を激しく突き上げた切っ先が限界に達してしまった。
とめる間もなく膨れた亀頭から噴き出した白濁液は、そのまま子宮口に引っ掛かり、綾華の膣内を跳ねながら襞や壁に絡まっていく。
お嬢さまを見てみれば、正常位のままブリッジでもするように背中を弓なりに反らせ、肉幹を咥えた秘孔から大量の愛液を飛沫させて絶頂に昇り続けていた。
痙攣硬直する肢体は、大きな肉果実を小刻みに震わせながら乳首を弾けそうなほど尖らせ、なめらかな腹部を何度も波打たせて膣内の様子を伝えてくる。
初エッチでの絶頂に、桜色の唇からは断続的な悦呻きが洩れ、きつく閉じた瞳から歓喜の涙まで溢れていた。
（すごい可愛いっ、こんな、こんな可愛いところもあったなんてっ！）
「くああっ！」
「ンぁあああ――――――――ッ！　あふッ……あッ……はぁはぁはぁ……」
「あっ、すごすぎですお嬢さま……見ているだけで……見ているだけでわたしも……ふぁ

ああぁぁあああああ――――――――っッッっ！」

処女を捧げてもらい、そのうえ本当の気持ちまで伝えてくれた綾華の肢体をもう一度突き上げ、残っていた精液のすべてを放出させた潤也は、そのまま彼女の肉果実を潰すように肢体の上に倒れ込む。

彼女も最後の精液と同時に絶頂を終わらせたらしく、ブリッジしていた背中を元に戻しながら、彼の体重を受け止めてくれた。

二人の近くではオナニーしていたメイドが同時に絶頂したらしく、胸が潰れるほど指を喰い込ませて揉みながら、手を挿入した白ショーツから大量の愛液を溢れさせて床に崩れ落ちている。

だが、今はそんな麻衣に目を向けようとする気さえ起こらない。

処女喪失にもかかわらず、激しく絶頂してくれた綾華の美しさに目を奪われ、好きだという気持ちがどんどん心の中に広がっていく。

「も、もう……そんなに見つめないでよ……」

恥ずかしそうに呟きながら、嬉しそうな、それでいてすこし生意気さを感じさせる瞳で見つめ返される。

「せ、せっかく胸を寄せてあげたのに、中に出しちゃうなんて……」

「えっ!?　あれはそういう……ゴメンっ！」

彼女の言葉に、慌ててあやまる。
絶頂直前で胸を寄せ上げたのは、「ここに出して」という意味だったらしい。
「あ、あやまらなくても……い、いいんだから……。お、お腹の中に出されて、わたくしも気持ちよかったし……」
言葉尻が小さくなったが、それがよりわがままな彼女を可愛らしくさせてしまう。
告白をしあい、膣内射精までして気持ちを確かめあったお嬢さま。
そんな彼女をもっと強く感じたくなってしまい、正常位のまま肢体を強く抱き締め、唇を重ねて舌を絡ませあう。
部屋には三人の呼吸音と、濃厚なキスをする音だけが響き、再び綾華とエッチをしたいという欲求が高まってきた。
「ま、また大きくなって……」
秘孔に挿入したまま萎えかけたペニスが、再び勃起した感触を感じたのだろう。彼女が照れながらも、嬉しそうな笑みを見せる。
「ごめん、綾華の中が気持ちよすぎて……、もう一回いいかな？」
「も、もう一回なんて……。い、いいけど……、今のムービーを見た後でなら、好きなだけ……っ!?」
自分の言葉に恥ずかしさが込み上げた綾華が、青い瞳を動かして大型モニターを見た途

端、声もなく驚いている。
あまりの変化に、どうしたのか視線を同じところに向けてみれば、自分たちが映っているはずのモニターが真っ黒になり、完全にスリープ状態になっていた。
「ま、麻衣……。今のわたくしたちの姿って……」
（そういえば、麻衣さんも居たんだよな……）
セックスやエッチ。という言葉がまだ恥ずかしい彼女が、甘い雰囲気で忘れていた麻衣に、遠回しの口調で尋ねる。
「え？　はぁはぁ……撮ってましたよ、ちゃんと……」
と言った黒髪美少女が、乱れたメイド服を直すこともなく立ち上がり、慌ててカメラをチェックする。が、どうやらコンセントが入ってなかったようだ。
つまり、内蔵されているバッテリーが完全に切れている。
「う、映っているはずです。お嬢さまの初体験、撮れてなかったら、わたしがゆっくり見られないじゃないですかっ」
結婚相手に見せて縁談話を壊すんじゃなかったのだろうか。とも思ったが、そんなツッコミを入れてる余裕なんてない。
潤也は正常位で綾華と繋がったまま、コンセントを入れてモニターに映し出された映像を見る。

駆け巡る激しい焦燥感と痛疼きに、思いっきりペニスを突き刺し、膣襞をすべて掻き捲って子宮口を突き上げた瞬間。

強烈な放出感とともに精液が噴き出してしまった。

彼女を孕ませるために放出した濁液は、そのまま切っ先をぶつけた子宮口に飛び散り、吸われるように子宮内へと流れ込んでいく。

「んぁああッ、あふッ、入って……わたくしの中に……一番奥に……ンぅうッ……ッ、ッ、ッ……ふぅああ……」

四つん這いのまま上半身を崩した彼女が、肢体を半痙攣させながら短く呻き、秘孔と肉幹の隙間から愛液を吹き出した。

綾華の呻きが一回聞こえる度に、彼女の膣内に突き刺さったままのペニスには強烈な痺れが走り、膣襞と膣壁に扱かれる切っ先から精液を搾り出されてしまう。

「くあっ、気持ちいい……綾華の中で俺のが……くおおっ！」

「あふッ、ッ……ッ……あッ……ふぅあああッ！」

びゅるッ！　びゅるる……。

彼女の膣に痺れさせられ、ペニスに残っていた最後の精液まで放出させてしまった。

一回で出せる白濁液のすべてをお嬢さまの膣内に注ぎ込んだ潤也は、秘孔にペニスの根元まで突き刺したまま、ぐったりと彼女の背中に崩れ落ちていく。

まだ絶頂が終わらない綾華の肢体は、下を向いても形を崩さない肉果実をプルプルと揺らしながら短い呻きを繰り返し、秘孔から濃い愛液を溢れさせている。

「んぁッ……はふッ……ッ……はぁはぁはぁ……はぁあ……」

射精が終わってから数分。やっと彼女が絶頂を終わらせ、ベッドに崩れ落ちていく。

身体の下に感じるあたたかな女の子の体温。しかも、絶頂を終わらせたばかりの肢体は、大量の発情汗が吹き出し、艶めかしく濡れ光っている。

秘孔や膣はマッサージでもするように肉幹を咥えたまま蠢き、萎えるはずのペニスが、まったく小さくなろうとはしない。

（どうなってるんだ俺？　出したばかりだっていうのに）

自分でも不思議だ。

射精したばかりだというのに、エッチする前よりペニスが疼き、彼女の中で硬くなっている。手は自然とお嬢さまとシーツの間に滑り込み、二人分の体重で潰れた肉果実を揉んでしまった。

「ふぅあうッ⁉　む、胸……まだ敏感なのに……」

「ご、ゴメン……」

と言いながらも、柔らかくて張りのある美峰乳を揉むのをやめられない。

手を動かし、フワフワとした弾力の胸を揉む度に、乳悦に感じた肢体がピクピクと震え、

秘孔が甘噛みでもするように肉幹の根元を締め付けてくれる。
部屋には、二人の汗と彼女の甘いミルクのような肌の香り、そして、すこし鼻を突く愛液の匂いまで広がり、潤也の興奮を冷まさせようとはしない。
（ヤバっ、またシたくなってきた……）
膣内のペニスがビクンと震え、肉幹が再び脈動し始めた。
ペニスの内部はジンジンとした痺れが走り、肉幹の根元がざわついて精液を溜めようとしている。
「んっ、あっ……胸ばかり……潤也、もしかして……」
恥ずかしげに青い瞳を震わせて見つめてきた。
どうやら膣内の変化と胸を揉む手の動きで、再び興奮してしまったのが分かったらしい。
「続けてもいいかな、綾華」
「続けてもって……。もう、しょうがないんだから……。でも……ンぁっ」
エッチを続けることに困惑しながらも笑みを見せた彼女が突然動き、艶めかしい声でペニスを引き抜きながら、ベッドでアヒル座りになってエッチ直後の肢体を披露してくる。
肉果実の上まで捲り上げられたホルダーネックの白いトップスに、捲れ返って大事な部分を晒す青いミニスカート。
下着をつけてない今の彼女は、それだけで興奮を高めてくれる。

しかも、大きな肉果実は汗でヌメ光って上下に揺れ、愛液を溢れさす秘孔は小さく口を空けたままの状態だ。

自分で彼女をそんな恰好にさせたとはいえ、今すぐに押し倒したい衝動に駆られる。

「綾華……」

「ダメっ」

揺れる美峰乳と限界まで尖っている薄ピンクの乳芽の誘惑に負け、思わず手を伸ばそうとした途端。彼女が両手を手ブラにして肉果実を隠す。

「こ、今度は、わたくしがする番なんだからっ、んんっ……」

クチュっ……。

抱きつくようにしてキスをしてきたお嬢さまが、そのまま美峰乳まで潤也の胸に押し付け、舌まで絡めてきた。

「綾華？」

「んチュふぁ……今度は潤也が寝て。わたくしが気持ちよくしてあげるんだから……」

彼女に押し倒されるように仰向けになると、恥ずかしそうに汗で身体に張り付き、エッチで乱れた服を見つめてくる。

「擦れるのイヤだから、服……その……」

それだけで彼女がなにを言おうとしているのか分かり、仰向けになったままポロシャツ

とジーパン、そしてパンツを脱ぎ捨てた。
「綾華も全部脱いでよ……」
「わ、わたくしは、恥ずかしいから……こ、このままでいいでしょっ！」
半裸の方が恥ずかしいような気もするが、今はどうだっていい。
連続でエッチできる興奮に、お腹に張り付くほど反り返ったペニスが震え、秘孔を待ち侘びるように切っ先を上下させてしまう。
「さっきわたくしの中に出したばかりなのに、もうこんなに大きくさせてるなんて……」
そう言いながら嬉しそうにペニスを見たお嬢さまが、青いスカートの裾をお腹で押さえながら股間に跨ってきた。
「あのときの麻衣みたいに、わたくしも……」
ゆっくりと膝を曲げて肢体を下ろしてくる綾華。
その姿を下から見ている潤也には、彼女のすべてが丸見えだ。
淫唇を完全に左右に広げている大事なところや、その中で薄く口を開けて内壁を覗かせている膣口。その向こうでは桃尻まで覗け、早く騎乗位で彼女を貫きたくなってしまう。
「丸見えだよ、綾華の大事なところ」
「そ、そういうことは言わないでって言ってるでしょ……ふぅあんっ⁉」
文句を言いながらも腰を下ろしてきた彼女の淫部が、ペニスにぶつかってきた。

だが、秘孔に挿入するはずの亀頭は彼女の真下にはなく、淫部にぶつかっている部分は肉幹だ。
「えっ、ど、どうして……？」
お嬢さまが不思議そうに青い瞳を向ける。
彼女が失敗するのも当然だ。メイドとのときは対面座位でペニスが上を向いていたが、今は仰向けで寝そべり、興奮で肉幹が反り返ってお腹に張り付いている。
「な、なんでそんなになってるのよっ。か、硬くて……」
「なんでって言われても……うおっ⁉」
失敗したことに恥ずかしがった綾華が、慌ててペニスを握ってきた。が、硬くなりすぎて、上に向かせられないらしい。
「も、もうっ。だったら、こうしてあげるんだから……」
「くああっ⁉」
突然ペニスに駆け巡ってきた悦痒さに声が出てしまう。
肉幹を上に向けられなかった彼女が、淫部を股間に押し付けた素股騎乗位で腰をくねらせてきたのだ。
グニャグニャと形を歪めてペニスを擦る淫唇と、肉幹の裏側にキスをするように吸い付いてくる秘孔の感触に、射精したばかりの尿道が心地よく痺れていく。

ギュチュ……ヂュギュヂュニュ……ヂュズグリュ……。
「ど、どう潤也……んっ、気持ちいい？」
「くっ、はぁはぁ……や、ヤバイって……これじゃまた我慢が……」
彼女が桃尻を前後させて淫部でペニスを擦ってくる度に、ペニスの内部にジンジンとした悦痛みが走る。
こんな性器同士の擦り合わせをされていたら、瞬く間に射精をさせられてしまう。
「い、入れさせてよ綾華。また爆発しちゃいそうなんだ……」
「もう、しょうがないんだから……、じゃあ自分で押さえてて」
嬉しそうに腰を上げるお嬢さまの姿を眺めながら、潤也はペニスを握って切っ先を秘孔に向けた。
「こ、今度は失敗なんて……あっ、ふぁあっ……」
再び彼女が腰を下ろしてきた瞬間。切っ先が淫唇を撫で上げ、小さく口を空けていた秘孔へと突き刺さる。
「わ、わたくしからこれを入れて……また気持ちよく……くはぁああっ!?　ひぃうんンんんンんんンンンんんンンンッッッ！」
ジュプッ！　ジュプジュプジュプジュプウウウウウゥゥゥゥゥッッ！
ゆっくり挿入するつもりだったらしいが、すでに一回エッチを終わらせていた秘孔はあ

っさりと亀頭を呑み込んでしまった。
その刺激に耐えられなかったお嬢さまは、艶めかしい嬌声を張りあげながら膝を崩し、一気に肢体を落としてペニスの根元まで受け入れている。
すべての膣襞を捲り返しながら、真っ直ぐ子宮口に突き当たった切っ先は、彼女の体内でせっかく下りてきた子宮を戻すように持ち上げてしまい。肉幹には再び無数の膣襞が舐め絡まり、表面に付着した幾つもの膣粒で擦りながら、奥へと向かってうねっていく。
「ふぁあッ、あふッ！　いきなり全部……全部入って……」
身体の上の肢体が小刻みに震え、肉幹の根元まで咥えた秘孔からコプコプと愛液が溢れてくる。
大きな肉果実は華奢な肩とともに上下に動き、呼吸を整えようと魅惑的に揺れた。
「気持ちいい、気持ちいいよ綾華」
ジュプッ……ジュプッ……ジュプッ……ジュプッ……。
「ふぅあぁッ、あふッ！　動かない……ひゃうッ！　まだ動かないで……今動かれたらわたくしまた……」
「また、どうなるの？」
絶頂した彼女の身体が過敏になっていることに気づきながらも、ゆっくりと腰を動かせて騎乗位の彼女を突き上げる。

連続でのエッチで捲れ返る秘孔からは、愛液とともに子宮から押し出されてきた白濁が溢れ、二人の接合部でネチャネチャと粘糸を引いた。

「は、恥ずかしいッ、こ、こんな音……ひゃうッ！　ンあッ！」

音と下からの突き上げで肢体を痺れさせたお嬢さまが、腰の動きに併せて細い肢体を上下に動かし始めた。部屋には淫らな音が響き渡り、綾華の喘ぎ声が隣の部屋にまで聞こえるほど大きくなっていく。

「あふッ、潤也……潤也ぁああ……」

青い瞳を潤ませ、何度も名前を呼びながら肢体を動かしてくる。

彼女の身体が上下する度に、大きな肉果実が波打つように揺れ、捲れ返る秘孔から愛液まみれのペニスが亀頭近くまで現れてきた。

見ているだけでも射精してしまうような彼女の淫らな姿に、腰の動きはより速まって秘孔を突き刺し、肢体を上下に揺さぶってしまう。

「ンふぅうッ！　あふッ、ひゃうッ！　奥に……奥に当たる……わたくしもう……もう潤也だけのものだから……。して……わたくしをめちゃくちゃにしてぇえぇッ！」

肉体が異常なほど感度を上げている彼女が、腰の突き上げに併せて激しく肢体を上下に動かし始めた。部屋には淫らな挿入音が鳴り響き、秘孔が捲れ返る度に愛液が飛沫してベッドシーツに染みを作る。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

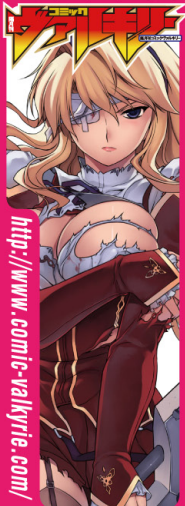
詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ！
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ！
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利！
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中！



http://www.comic-valkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌！　18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出！　新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム！「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場！

http://www.2d-dream.jp/

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める！携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ！